

みかじま めいしや
三ヶ島の目医者（めいしや） 鈴木一貫（いっかん）

いま やく
今から約300年ほどまえ、みかじま こうじや
三ヶ島の糎谷（こうじや）に生まれた鈴木宗閑（すずき そうかん）とその弟の鈴木重栄（すずき しげよし）の兄弟がそれぞれ目医者を開きました。兄弟は協力して村内や近くの村の人たちの目の病気を直しましたので、信頼をえるようになりました。そして、兄弟の家はそれぞれ、門の色を赤と黒にぬっていましたので、赤門・黒門の目医者として、江戸はもちろんのこと、関東一円（いちえん）の人たちにも評判となり、おおぜいの人たちが目の病気を直してもらおうと、三ヶ島までやってきました。

鈴木宗閑からかぞえて4代目の鈴木一貫（すずき いっかん）がこの物語の主人公です。一貫は12才のとき、お父さんの道淳（みちあつ）を失い、おじいさんの龍硯（たつすが）によって育てられました。おじいさんは、一貫が一日でも早く目医者となることを希望しましたが、なかなか期待（きたい）どおりにはなってくれず、ぶらりと江戸（今の東京）にでかけてしまうことがしばしばありました。一貫は、目の病気のことだけを学ぶ目医者ではなく、目以外の病気や貧しい人々を救う政治のことも学びたかったのです。

一貫のねついを知ったおじいさんは、一貫のために友人や知人からたくさんの本をかりてきました。山のよつに集まった本を前にして、一貫のもつれつな勉強がはじまりました。そして、毎日朝から晩（ばん）まで机に向かうこと3年。ついに一貫は、手に入れた本をすべて読むことができました。15才の少年の努力はたちまちのうちに人々の評判（ひょうばん）となりました。

この一貫について、こんな話がありました。

「まことにおそれいますが、三ヶ島の目医者（めいしゃ）は、どちらでしょうが。」
畑ではたらいっている善吉（ぜんきち）に見知らぬ顔の親子がたずねました。

「この先だよ。赤い門が立っているから、すぐにわかるよ。ところで、どちらから来ましたか。」と善吉がたずねるよ。

「へい、かわいさの近くの『せしおんぎ』からでういいます。」

「それはまた、たいへん遠いところから来ましたね。おつかれでしょう。」

「でも、この子の目が直るのですから……。」

「きつと、良くなりますよ。」

「ありがとうございます。」

と言いつつ、この親子は、赤門をめざして歩きはじめました。

このころでは、三ヶ島の目医者の評判はしだいに広まり、遠くは房州（ぼうしゅう 今の千葉県）の方からもやってくるようになりました。

一貫は、遠くからのかんじゃや泊（とめてちりょう）をしなければならぬ人たちを、どうしようかといつものなやんでいました。

あるとき、一貫は、善吉にそつだんを試してみました。

「まえまえから考えていたのだけれど、逗留所（とつりゆうじょ 今の病室のようなもの）をたてたいと思つのだが。」と、善吉にきりだしました。

「先生、それには、たくさんのお金がかかりますよ。まして、先生のところへ来るひとたちは、まずしい人たちばかりで、とても、泊まれるお金がないですよ。」という返事だった。

たしかに、ちゃんとした病室をつくるには、たくさんのお金がひつようだし、家にもそんなにお金があるわけでもないし、病人にお金を出させることもできませんでした。しかし、一貫を信頼して、たずねてくる

人たちのことを考えると、時間をかけて病気をなおさせるための逗留所がどうしても必要だったのです。

そして、2年ほど過ぎた、ある日、めずらしい女の客がありました。

「おひさしぶりです。」

「なあんだ、きぬちゃんか。えらく大きくなってわからなかったよ。前沢へお嫁に行ってからもう3年になるね。」

「はい、実は、今日はお願いがあつてきたのです。先生、逗留所を作らせてください。」

「どうした、急に。きぬちゃんが作ってくれるのか。」

「そうではないんです。うちの人が、お前のごやっかいになった先生のためならば、ぜひ作りたいて言
うんです。」

「そうか、たしかきぬちゃんのご主人は大工だったね。」

「こんな話を外から聞いていた清治（せいじ）があわてて入ってきました。」

「清治です。むかし、きぬが大変お世話になったそうで。」

「いや、わしは特別には。それはそうと、きぬちゃんの話はほんとうかね。」

「はい、先生に目を直していただいた松造（まつぞう）から聞きました。」

「それは、ありがたい話だけど、お金はないよ。」

「それはあまり気にしないでください。もうけようと思っちゃんいませんから。先生、何十年前の話になりますが、私が目を悪くした時に、この家に泊めてもらって直してもらった時がありましたが、あの時のお金だつて、全部を払つてはいないんですよ。おとつあんは、何も言わないで死んでいったけど、あの時のお礼がしたいんですよ。」

清治の熱意を感じた一貫は、逗留所作りをお願いすることにした。それから2年半後、とつとつ逗留所は完成した。一貫は、この逗留所の名前を、三ヶ島にちなんで「三嶋館（みしまかん）」と名付けた。

三嶋館の完成が知られると、今まで以上の患者が訪ねて来るようになった。一貫は、忙しさも苦にせず、貧しい者たちには衣食を与えた。また、不幸にして亡くなり、親戚（しんせき）もない者たちが出た時は、近くの妙善院（みょうぜんいん）に手厚くほうむってあげた。